【115】

氏　名(本　籍)	徐　璣(韓　国)
学位の種類	博　士(デ　ザ　イ　ン　学)
学位記番号	博　甲　第　1038　号
学位授与年月日	平成 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	**大学キャンパスの発展過程と空間構成に関する研究**
主　査　筑波大学教授　工学博士	土　肥　博　至
副　査　筑波大学教授　工学博士	栗　原　嘉一郎
筑波大学教授	下　山　真　司
筑波大学教授　工学博士	谷　村　秀　彦

論　文　の　要　旨

人類の発展に貢献しながら長い歴史をもって発展してきた大学は，今世紀に入ってその個有の活動空間としてキャンパスを形成するようになっている。さらに世紀後半に入って大学は大衆化し，そこから多くの問題が発生してきたが，それによって多くの大学が設立され，また郊外移転等が一般化し，キャンパスが急増するとともに多様化してきた。その中で，キャンパス計画の重要性はますます高まっているといえる。

著者は本論文において，キャンパス空間をデザインの対象として捉えるという明確な立脚点にもとづいて考察しようとしている。大学そのものやキャンパスの成立と変遷過程についての幅広い理解を研究の背景とし，今世紀における日本と韓国のキャンパスを直接の研究対象として，大学キャンパスの計画・設計論に接近しようと試みている。そのために，キャンパスの内部空間構成を分析，研究の中心的課題としながらも，キャンパスと周辺地域や立地都市との関係のあり方についての考察も重視している。

本論文は，序及び 6 章からなっている。各章における考察内容を要約すると以下のとおりである。

序において著者は，本テーマについての問題意識を述べ，環境デザイン研究の一テーマとして大学キャンパスを取り上げること，大学キャンパス研究の基礎的因子は「大学」とそれが立地する「都市」であることを明示し，それにつづいてなぜ都市と大学の関係の究明が必要なのかを論じている。

第 1 章は研究全体の枠組みを準備する部分である。研究目的，方法，先行研究，都市と大学の関係及び研究対象の 5 節からなっている。目的の項では，研究を取り巻く社会的背景を論じた上で本研究がキャンパスの成立・変遷過程，都市との関連性およびキャンパス内部の空間構成の 3 つのサ

ブテーマからなり，それらを関連づけて全体としてのキャンパス計画論を導く，としている。方法の所では，具体的に日本と韓国の過去から現在までのキャンパスを扱うこと，方法は実証的な資料収集とその定量的，定性的解析によることを示している。つぎに，先行研究を体系的に整理した上で，歴史，都市，空間構成にまたがる本論文の独自性を位置づけている。都市と大学の関係の項では，主として都市計画分野における既往研究に依拠しながら，関係の捉え方について考察を加え，研究対象の節で日韓両国の大学の状況について概観している。

第2章は，研究の1番目のサブテーマである歴史的発展過程について論じた部分である。ここではまず，日韓両国の大学について，日本では1918年の大学令の公布，韓国では解放の年1945年以降を対象として限定し，大学制度，学生数や大学進学率といった大学そのものの存在形態の変化に着目して，日本を4期に，韓国を3期に仮説的に時代区分をしている。ついで全キャンパスの立地位置について，全国レベルと首都圏レベルという2つのレベルで分析し，その結果上記の仮説的区分がほとんど空間的分析と合致することを立証した。また韓国においては仮説の一部を修正している。これらの作業の結果，日本は1期（1918～48年），2期（1949～64年），3期（1965～72年），4期（1973～現在）に，韓国は1期（1945～72年），2期（1973～79年），3期（1980～現在）にそれぞれ区分されることを示した。最後に両国の発展過程を比較し，大きくは類似した変化を見せるが，韓国の変化がはるかに急激であることを明らかにした。

第3章は2番目のサブテーマである，都市とキャンパスの関係性についての考察である。分析の対象とするキャンパスは，日本89，韓国76で，対象都市はこれらのキャンパスが立地するすべての都市である。分析指標としては，都市特性を示す3項目，キャンパス特性を示す5項目，都市とキャンパスの関係を示す7項目および周辺地域との関係を示す9項目の合計24項目を取り上げ，これらについて詳細な調査に基づくデータを作成した。ついでこの24指標を変数とする主成分分析を行い，日韓両国ともほぼ同じ5因子の構造を得ている。とくに都市と大学の空間的関係を規定する条件として，第1因子の「周辺地域の成熟度」と第2因子の「キャンパスの開放度」を明らかにしたことは大きな成果である。さらに第1因子の構造を詳細に分析し，「学生街の成立の有無」が大学と都市の関係の良否を端的に示す指標であることを導き，早稲田，八王子，筑波の3地域の学生街についてケーススタディを行っている。

第4章，第5章は本研究の3番目のサブテーマでありかつ中心的なテーマである，キャンパス内部空間の空間構成とその変容について分析，考察した部分である。第4章では日本のキャンパスを扱っている。まず前章と同じ89キャンパスの過去を含めて259プランを収集し，これを分析対象としている。現代の個別で多様なキャンパスを分析するために，著者は，空間構成を決定づけるものとして空間軸の存在，建物の集合配置方式および動線タイプの3要因を仮定し，これを用いて7つの空間タイプを抽出した。

つぎに関連要因として時代条件2項目，立地条件2項目，敷地条件3項目，建築条件3項目，アカデミックな条件2項目，総合的な環境を示す1項目の計13項目を指標とした。タイプと関連要因の関係について分析し，タイプの適合性を確認し，結果として上記の3要因の妥当性を主張してい

る。また関連要因の中で，建築条件の寄与の度合の大きさを明らかにしてデザインの主体的判断の重要性を示した。

第5章では韓国の大学を対象に前章と同じ方法で分析している。得られたタイプは日本と共通の7タイプと韓国独自のもの1タイプで，ほぼ同じ条件で記述できることを明らかにした。ただ，タイプの分布状態には大きな差異があり，韓国では明確な設計意図に基づくタイプのキャンパスは日本に比べて少なく，キャンパスデザインがまだ成熟していない状態にあることを明らかにした。

第6章は本論文のまとめにあたる部分である。第1節では前章までの考察で得られた成果を整理し，第2節でこれらの知見を下敷きにしながら，キャンパス計画を展開している。とくにその最後で，試論として，キャンパスの開放性，個性化，グルーピング，歩行空間，アカデミックコア等について，計画上のポイントを示しながら論じている。

審　査　の　要　旨

大学キャンパスは都市を構成する様々な地区のひとつに相当する地区空間である。どんな地区空間においても，良質な環境を実現することの重要性は変わるものではないが，大学は教育，研究という知的活動の場として，また感受性豊かな青春期を送る環境として，さらには近代的な意味で機能別に分割されにくい地区空間として，とくにその環境質の追求がなされるべき対象である。

キャンパス計画に関連する課題は，その歴史的形成，発展過程の研究，大学教育計画と空間との対応関係の研究，立地地域との相互影響図式の研究，各々の施設内容と関連性の研究，キャンパスの成立後の空間変容の個別的研究など，多岐にわたる。本論文はキャンパス内部の全体的な空間構成の研究を中心に据えながら，形成発展過程や都市との関係まで含んだ，幅広い内容をもつ。著者がこのような課題を選択した理由は，設計対象としてキャンパスを捉えるには，断片的なアプローチは有効ではないと考えたからである。本論文の最大の特徴は，この設計者としての立場を最優先させ，そのため従来極めて困難とされ回避されることの多かった，空間そのものを研究対象とした点にある。

具体的には日本および韓国のキャンパスを対象に，その成立と発展の過程を明らかにし，立地地域との関係を構造的に分析してキャンパス計画の周辺条件を整理した。ついで内部空間構成を決定づけるデザイン要素として，軸，集合形成，動線タイプを抽出し，それによる類型化を行ってその有効性を確認するとともに，類型を規定する諸要因の性格を明らかにし，デザインの規範についての考察を加えている。

本論文は，この包括的な課題に対して手堅い方法で接近していること，膨大な資料を収集しこれを的確な方法で分析していること，適切な論理構成で設計論に結び付けていることなどの点で優れたものである。ただ，課題の大きさのために対象を日韓両国の事例にしぼらざるを得なかったため，キャンパス計画としての一般論にまでは到達し得ていない点が惜しまれる。

以上の諸点から，本論文は独自性のある充分な研究の水準に達しており，環境デザイン分野の研

究の発展に貢献するところが大きなものと認められる。

よって，著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。